

原題 「海軍の伝統と海上自衛隊」

原文はA4版12ページ。

以下、原文をそのままに、欄外にページを付与したもの。

海軍の伝統と海上自衛隊

中村悌次

今年は水交会発足五十周年になりますが、前身の水交社が発会式を挙げ、荘子の「君子の交わりは淡くして水の如く、——君子は淡以て親しみ——」から採って水交社と名付けたのが明治九年三月のことですから、今年はまさに126年目に当たります。占領下、解散を命じられ、ようやく独立を回復した直後に再発足してからが50年、その節目に先立ち海上桜美会と一体化が実現した意義は大きいと思い、この題目を選んだ次第です。それは、昭和27年の水交会発足のときから、80年の歴史を持っている水交社を継承すること、将来は海上警備隊（海上自衛隊）に資産を譲ることなどが同意されていたからでありまして、戦没者等の慰霊顕彰、海軍の良き伝統精神の継承等が、水交会の寄付行為に成文として明確にされたのは、昭和55年の改正からであります。皆さんよく御承知の米内海軍大臣の遺囑や山梨初代水交会会長の志以来関係者には十分伝えられてきたことであります。

それでは私がこの題目でお話できる素養があるかと問われれば、甚だ忸怩たるものがあります。私が海軍にいたのは生徒の間を含めても約十年、とても海軍が身につけているとはいえません。一方海上自衛隊の方は退職して二十五年が過ぎ、最近の隊員の気風や悩みに接しておりません。今年五十年を迎えた海上自衛隊の前半しか知らないわけで、この変化の激しい時代にどれだけ今日の実態に即した話ができるか、自信は全くありません。そう自覚しながらも、先輩方が少なくなられた今日、誰かがやらなければならないとなれば、お断りも出来ないだろう、海軍についても、海上自衛隊についても、お聞きになる皆様から間違っているところ、疑問のあるところなどをご指摘いただき 是正できるなら、あるいは責め的一端ぐらいは果たせようかと考えて、まかり出た次第であります。

去る八月十四日NHKスペシャルで「海上自衛隊はこうして生まれた」という題名で、主として吉田英三大佐の回想とY委員会の記録に基づいて海上警備隊創設の経緯が放送されました。前後にもっともらしく憲法をもってきて海上自衛隊が憲法上問題があるのではないかと示唆するなど、如何にもNHKらしい臭みはありましたが、また海上警備隊の創設が旧海軍と米海軍が手を組んだ陰謀であるかの如き誤解を与えかねないところはありませんでしたが、全体を通じて、海上自衛隊が海軍の伝統を継承して育ったことを明らかにしていたと思います。私にいわせれば、あのような時代においてもなお海上防衛力の再建を研究し続けたのは何故か、それは日本にとって海上防衛が死活の問題であるからである、それではどうして海上防衛が死活の問題であるのかななどを、明確にして欲しかったということですが、それは、現状では望みすぎかもしれません。

ところで防大一期で統幕議長をやられた当水交会の佐久間副会長は、「伝統の継承」と題したある講演で、「伝統が与えてくれるものは、一つは長い間に蓄積された知恵、知識、それに

基づく判断力、次ぎに様々な世代との連帯感、それに基づく勇気、安心感、いわば心の支え、そして所属する集団に対する一体感からくる愛情」であり、海上自衛隊は米内大将が言い残された伝統の継承という課題を確実に果たしている、と述べ、その具体的な例証として、ペルシヤ湾派遣掃海部隊の感動的な活動を詳しく話しておられます。そして海軍の伝統が継承された要因として、組織としての継続性、具体的には航路啓開業務を継続してきたこと、第二には海上自衛隊誕生の経緯すなわち米海軍の厚意とY委員会の見識そして第三に海上自衛隊を創設し育成してきた主流の人々が海軍の人であったことを挙げられました。この佐久間さんの考えには全く同感であります。今日は別の切り口から、海軍のどのような伝統が継承され、何処が違っているかを検討してみたいと思います。私は、水交会と海上桜美会との一体化が問題になった当時、何時も言っておりましたのは、同じ日本人が海上防衛という同じ目的に挺身する以上、必ず共通するものがあるということでした。保安（防衛）大学校が創設された頃、指導官として直接教育に当たったのは、私が兵学校教官当時指導した七四期の人たちが多かったのですが、これらの人たちがよく私のところに来て「教官、口惜しいですよ、私が君らの先輩としてと言いかけると、彼らは、貴方を先輩と思っていませんと言うのですよ」と訴えたものでした。旧軍とは関係のない新しいものを創るという当時の空気、意気込みといっても良いでしょう、がよく分かります。それが何年か経って、今度は中隊指導官か大隊指導官として防大に勤務した同じ人が「あのころ先輩と思わないと言った学生が、小隊指導官になって来ていますが、私たちが言ったのと同じことを言って学生を指導していますよ」と笑ったことです。「風吹きすさび、波怒る、海を家」として、狭い艦で二四時間暮らす間に、自然に身に付くというよりは、付けざるを得ないといった方がより実際に即していると思いますが、ものの考え方や躰、いわゆるシーマンシップは、時代や国籍に関係なく共通したものがあります。海軍が、キリスト教などとも世界共通の宗教といわれるゆえんであります。

かつて「日本海軍史」の編纂に際し、内田一臣さんの御指導のもと、海軍の伝統、体質を研究しましたが、その伝統、体質が培われた要因を分析して、第一に海を舞台とする軍隊であること、第二に日本人から構成され、日本のおかれた国際的、政治的、経済的、社会的諸条件の中で任務を達成しなければならなかったこと、第三に海軍自体がその発展の過程において自ら作り出した諸制度やその運用、あるいは経験した重要事件の影響特に戦争の教訓の三つを挙げ、実際にはこれらが渾然一体となって特異の伝統体質が形成されたと考えました。この考えは今でも変わっていませんので、これに沿って海軍と海上自衛隊の同じようなところ、大きく違ったところを見てみましょう。

同じようなところについては、先程も申しましたが、海を舞台とする軍隊、軍隊といって悪ければ、実力部隊といっても良いですが、これから生まれてきたものとして、先ず思い当たるのは、隊風ではないかと思えます。海上自衛隊が防衛庁記者クラブなどから「一致団結、旧套（伝統）墨守」とからかわれるように、任務第一、責任完遂を基盤として、指揮官を先頭によく統制がとれ団結が堅く、上下左右の相互信頼が篤い隊風は、海軍でも海上自衛隊でも変わらないと思えます。上辺だけの虚飾や虚礼が嫌われ、親しい中にも礼儀とけじめを忘れず、公私の別は厳格ながら、肩肘張らずザックバラン、ユーモアや冗談が通じ、自分が正しいと思う意見は自由に遠慮なく述べられる、といった雰囲気は多少の差はあっても、大きくは変わっていないといえましょう。海上で勤務するために必要なシーマンシップや躰についても先に触れたとおり全く変わりようがありません。しかし、科学技術が大きく進歩した今日では、隊員の習得し演練すべき技能の多さと複雑さは海軍時代の比ではありません。その中でシーマンシップを育成するには、従来よりは一段と苦心と工夫を重ねて努力する必要があるというところでは

よう。航法機器は勿論艦艇、航空機の操縦性、陸上あるいは基地からの支援なども隔世の感があるほど進歩し、戦術運動や編隊行動も昔とは大きく変わった今日、航法にしても、操艦にしても、編隊運動にしても、あるいは各種運用作業にしても、海軍時代のような入神の技量そのものが不要でなくなり、重点の置き方は違ってきましたが、船乗りとしての基礎が重視され、潮と風と言われた天候や海上模様に即応する心構えが身体に染みついていることに変わりはありません。

この隊風ということで、大きく違うのは戦闘に対する心構えです。海軍が七十余年の間に、日清、日露、日独、大東亜の各戦争の外、北清事変、シベリア出兵、上海事変、支那事変など多くの戦闘行動を重ね、「百般のこと戦闘を以て基準とすべし」ということが、当然のこととして自然に各人の身体にしみ込む隊風となっていた、いわゆる隊風の浸透的効果ということが文字通り生きていたのに対し、海上自衛隊は、創設以来有事即応を目標にしつつも、その実際の経験がないということ、ここが大きく違っています。つまり海軍では有事即応などと言わなくとも、当然のこととしてそうなっていたのですが、海上自衛隊では常に言い続ける必要がある、これが大きな差です。もともと自衛隊が出来た当時は、戦うということがまるで悪事であるかのように言いなされ、戦車という言葉が使えなくて、特車と言ったという今から見れば笑えぬ笑い話があります。そして自衛隊の存在価値は戦わないところにあると言われ続けてきました。

政治の目標が侵略の未然防止にあり、自衛隊が抑止力として働くことを期待するのに全く異存はありません。しかし自衛隊がその期待に応えるためには、実際の侵略を排除できる能力と態勢があってこそであり、その意味では万事戦闘を以て基準とした戦前の軍隊と何ら変わるところはありません。しかし有事のあり得ることを考えたとは思えない憲法のもと、有事法制の研究すら長くタブーとなり、ようやく今年初めて国会で取り上げられたという状況のもとでは、真面目に考える人ほど疑問を持つのは当然であります。有事即応ということは、末端の部隊に行くほど真剣であり、中央、特に政治的上部に行くほど、全く考えていないか、稀に考えたとしてもいい加減、と言って悪ければ、問題が多いといえましょう。だからこそ栗栖統幕議長は、職を賭して、相手の奇襲に対し超法規的対応をせざるを得ない現状を訴えられたのであります。

また、この五十年、平和が続いたということは侵略の未然防止の使命を果たしたということではあります。未然防止を果たす要因には国際情勢や日米安保態勢等多くのものがあります。自衛隊の存在とその精強さや有事即応態勢が、重要な一つの要因であることは、観念的には理解できても、計数的に示すことは不可能です。これだけ練度を上げた、これだけ新しい装備を充実したといった努力の結果、何パーセント未然防止が向上したというように、直接目に見えて結びつくものではありません。米海軍を目標に猛訓練を続けた戦前との大きな違いです。こういう状況ですから、余程隊員自らが戒めていない限り、有事即応はお題目となり、建前になり兼ねません。それだけ指導上苦心が大きいということでしょう。また冷戦終結後自衛隊に与えられる使命も複雑多岐となり、即応すべき有事とはどんな様相かということも簡単ではなくなりました。私は情勢が変化したといっても、侵略に対し我が国を防衛するという基本に備えておけば、その他の事態に対しては多少の補備は必要としてもその活用あるいは応用と考えて良いのではないかと思います。どんなものでしょうか。

それでは今のような状況で、海上自衛隊はいざというとき役に立つかという質問を、私は在職中も退職後もよく受けました。部隊にどんな使命を与え、どんな制約を課すかという問題は別にして、私は何時も「ご安心下さい。今の隊員はだらしがないように見えるかもしれませんが、いざというときには昔と変わらず、必ず与えられた任務を完遂して、お役に立ちます」

と答えるのが常でありました。それは私が部隊指揮官として、直接隊員に接し災害派遣や監視、航空救難等の任務を与えられたときの目の輝きや真剣な働きぶりから確信したものであります。誰でも初陣のときは初経験です。戦闘の経験はなくとも、平素から任務第一、責任完遂の隊風のもとその心構えが確立していれば、いざというとき立派にそれぞれの任務を果たすことが出来るというのが、実戦の経験から私が学んだことであり、同じ日本人である以上、変わりはないと考えたからです。平成三年の湾岸掃海で海上自衛隊は見事にその期待が間違っていなかったことを示してくれました。戦争終結後とはいえ掃海の危険に変わりはありません。僅かの準備期間で、手当も補償も決まらないまま、隊員は長途の危険な任務に敢然と赴き、厳しい環境や試練によく耐えて立派にその責任を完遂したのであります。

もう一つ隊風に及ぼす社会的環境の大きな相違は、国民一般からの期待と支援の違いであります。歓呼の声や旗の波で送られ、「兵隊さんよ有難う」の歌や慰問袋に慰められた海軍当時は、ひしひしと国民の期待特に郷党の人々の大きな支援を、肌に触れて実感したものでした。少しは良くなったとはいえ、税金泥棒と面罵され、事ある毎によってたかってマスコミにたたかれる今の自衛隊員に、国民の期待を感じるというのも無理な話と思います。私が在職中最も腹が立ったことは、雫石事件でした。速力の早い全日空機に、遅い練習機が追突するというのも無理な話と思いましたが、いち早い全日空の声明を鵜呑みにして、マスコミは事故の実相を明らかにするよりも自衛隊の袋叩きに熱中し、防衛庁もひたすら詫げるだけ、対策はたださえ狭い訓練空域をさらに不便にすることだったと記憶しています。こんな国民を守るため、命を投げ出さねばならないことに、疑問を感じなかったといえは嘘になるでしょう。「なだしお」事件は退職後でしたが、作為的な悪意に満ちたニュース特にテレビ画面の作り方、海上自衛隊を潰してやると放言する記者もあったといわれる新聞など、全く同じような感じを持ったことでした。このような社会的背景では使命感の育成だけが頼りですが、それは国民の期待に添うというよりは、プロ意識という方が近いのではないのでしょうか。それだけに災害派遣などで、温かい国民の支援に接するときの隊員の感激とやる気に与える影響は大きいと思います。湾岸掃海の時も一般国民の激励が隊員の心の大きい支えになったと聞きました。

もっとも熱しやすく冷めやすいのは日本人の通弊、日露戦争当時浦塩艦隊が猛威を振るった頃、これを阻止できない上村艦隊が露探艦隊と呼ばれ、長官の留守宅に石が投げ込まれたという話が残っていますから、昔も今も変わらないという見方もできるかもしれません。私が自衛艦隊司令官でいたとき、座礁したLPGタンカー第十雄洋丸の処分を命じられたことがあります。このときも時間がかかり過ぎるとか、魚雷の一部が命中しなかったとか、いろいろマスコミ等からお叱りを頂きました。しかし、予算の制約で、それまで訓練魚雷とは別の実用魚雷のテストも許されず、水雷調整所の整備も進んでいなかった実状からすれば、望みうる最善の結果であったと、私は関係者全員の昼夜を分かたぬ努力に深く敬意と感謝を表したことでした。神と軍隊ほど、平時は忘れ去られ、事が起こったとき全能を要求されるものはない、という言葉があるそうですが、考えてみれば、軍隊がちやほやされる時代は、その国民にとって決して幸せなときとは言えないのではないのでしょうか。私は現状が決して良いとは思わず、大きく改善して貰いたいと願いますが、いわば甘やかされて育ったとも言える戦前の海軍よりも、苛められながら歯を食いしばって頑張ってきた自衛隊の方が、より逞しく、より靱強であることを期待している次第です。

やや脇道に入りましたが、教育訓練について、海軍と海上自衛隊の異同を見てみましょう。先ず精神教育ですが、海軍ではその基本が軍人勅諭に置かれたことはいまでもありません。そして理に墮したり、形式化することを避け、日常の実践を通じてその教を具現化すること

が重んじられました。その結果特に誠を以て貫き、与えられた任務を完遂することが、軍人の本分たる忠節を尽くす所以である、との信念が、海軍軍人の血肉となりました。そして先人の遺烈から感奮し、日常の勤務や生活を通じての機会教育と隊風の浸透的感化によって自ずから目的を達成することを期したものでありました。この考え方は海上自衛隊でも同じといえましょうが、大きく違っているのはその柱ともいべき軍人勅諭の無いことです。これに代わるものとして、「自衛官の心構え」が出ておりますが、権威は全く違っています。自衛隊も現代日本の反映でありまして、歪んだ道德教育や歴史教育を受けてきた隊員を、機会教育や隊風の浸透的感化によって何処まで教育できるか、大きな課題といえましょう。

厳正な規律の確立が軍隊の生命であることはいまでもありません。命令があるまでは、自由に意見を述べても、いったん命令が下されたあとは、自説を捨て、誠心誠意命令の完遂に努めるのが、海軍の伝統でありました。このことは今日も全く同じであります。海軍でも、命令に対して盲従ではなく自覚的、自律的服従が強調されましたが、受命者が無条件に服従するのではなくて、適法の命令かどうかを審査し、自己の責任で服従することになっている今日では、より徹底していると言えましょう。

もともと寡を以て衆と戦わざるを得ない宿命に置かれた海軍では、その解決策の一つを術力の精到に求めました。そして寸刻を惜しんで、朝な夕なに繰り返された猛訓練によって育成された術力は、平時としては最高の練度に到達していたと言えましょう。しかしそれは少数精兵であり、多年の訓練によって一握りの名人を生み出したものの、長期にわたる総力戦に応じうる質の高い要員は十分に確保できませんでした。開戦に備えた急速大拡張にさえ対応できず、二年三年となると大きな弱点となったのが実状であります。

この少数精鋭についての私の体験を紹介しておきましょう。昭和16年は特に猛烈な訓練が繰り返されて行われ、三月には前期の訓練を八月の初めには後期の訓練を終了して作戦準備に入ったのでありますが、この後期の戦技は本当に見事な練度を示すものでありました。ところが八月から九月にかけて戦時編制に伴う大異動が行われ、一挙に配員が若くなりました。私はこの異動で駆逐艦の水雷長予定者になりましたが、(十月に中尉に進級して正式発令)私の前任者は八年先輩の高等科学生を終わった人でそれが平時の普通の配員であったわけです。そのあとに兵学校の教務も短縮されて水雷長として必須の発射法とか雷撃法もろくに習っていない私が着任してのですから、艦長が不安を持ったのも当然でしょう。一週間の講習はありましたが殆ど自学自習、私の一生を通じてあれだけ真剣に勉強したときはありません。幸いなことに掌水雷長以下私の部下は艦隊で何年も訓練してきたベテラン揃いでしたから、魚雷の調整や操法などは任せて全く不安はなく、私が自分のやるべき事さえきちんと出来れば戦力発揮に支障はありませんでした。外の艦でも同じような状況であったと思います。17年11月第三次ソロモン海戦の頃には、敵がレーダーを使っていることは分かっていたのですが、こちらの多年錬磨の見張り能力に絶対の自信を持っていました。この海戦で沈んで名艦長の吉川中佐は新造の大波駆逐艦長になりましたが、その前任将校は私のクラスメートでした。つまり一年ちょっとの間に最後任から前任に成る程配員が逼迫していたわけです。下士官兵の方も新しい艦が出来ても配員出来るベテランはいない。新人を養成しなければならないわけで、忙しい任務に従事しながら訓練するのは容易ではなかったことと思います。18年11月「大波」はブカ島沖で敵の奇襲を受け全滅しました。さすがの吉川艦長もこの時期の彼我の戦力の差は克服できなかったのであります。この少数精鋭の破綻は、搭乗員の方がもっと深刻であったと思いますが、省略しましょう。

このように 有事に於ける大量養成の必要性、短期間に平均的練度に到達させるための教育訓練の重要性、戦法の固定化を避け、技術の進歩や情勢の変化に応じうる柔軟な思考の大切さなどが認識されず、その研究や準備はありませんでした。つまり戦争様相の変化を洞察できず、これに追従できなかったことが、致命的欠陥となったものでした。

この教訓は自衛隊では十分に反省されており、米軍から急速養成のやり方も学んで、訓練重視の伝統のうえに柔軟性ある考え方を培い、合理的に目的達成を目指す技能教育が行われていると思います。

次に人事行政に触れてみましょう。海軍に郷愁を感じる一つの大きな理由に人事が公正で派閥がなかったことを挙げる人が多い反面、保守的に過ぎて戦争に適応出来ず敗戦の一因となったと論ずる人も少なくありません。

御承知の通り海軍の幹部養成は、技術とか軍医とかの特殊部門を除き、いわゆる海軍三校すなわち兵学校、機関学校、経理学校で行い、その不足分を下士官からの昇進者で補うというのが基本でありました。三校の卒業者は出来るだけ大佐まで進級させたいという人事管理上の要求から、生徒の採用人数も抑えめに決められました。その為戦争や八八艦隊の創設など幹部の急増が要求される事態が起こると、大きく採用人数を増やし、その必要が去ると急減するといったことが繰り返されました。あとになって、予科練制度とか二年現役制度、予備士官制度等が採用され、多様な幹部の採用に道を開きましたが、戦争様相の予測を誤ったため、その措置が余りにも遅きに失したと言えましょう。

また機関科将校制度が長く問題にされながら、兵学校と機関学校を一体化し、問題の根本的解決を図ったのが、やっと終戦間際であったことも、海軍首脳の保守的態度がその一因でありました。この問題が、軍令承行令とともに海軍の空気を暗くした事は否定できません。軍令承行令は危急時における指揮権の継承順位を明確にして疑問の余地をなくすという目的は達成したものの、戦争様相の変化によって人事行政上その他多くの不具合を生じ、さらに兵科将校の自覚を促した反面、独善と言いましょいか、思い上がりを助長し、平時にまでその悪い影響を及ぼしたことは深く反省される所であります。海上自衛隊では、創設以来防衛大学出身者と一般大学出身者を幹部候補生として採用し、全く同じように教育し人事管理するという方針で一貫していますが、実績から見ると、防大出身者がより重視されている結果になっているのは、やむを得ないかもしれません。また、海曹の高学歴化と高齢化に伴って中下級幹部を補充するため、部内から幹部候補生を募集し教育する制度を導入し、海軍の予科練制度にも似た航空学生制度とともに、B幹部と通称されています。これら戦後の制度は、海軍の反省に基づくだけに平時には適切に運営されているように思われますが、有事にはどうであるのか、予備員のほとんどないことともに、今後の問題でありましょう。

人物評価の基準を考課表あるいは勤務評定の累積に求めることは、昔も今も変わりはありません。人間が人間を評価する以上、長い目で見て、評価する人の個人的な偏りを是正するには、これしか方法がないということでしょう。しかし結局人物評価そのものはその社会の文化水準を表すものであって、海軍の評価が甘く、真の逸材殊に大器晩成型や職務の修練によって顕著に伸びた人材の選別と発掘を困難ならしめたといわれる問題は、今日もあまり変わっていないとは言えないでしょう。在職中大変立派な評定を貰ったある人をその評定を書いた人の部下指揮官にする相談をしたところ、その評定官はあの人だけは止めて下さいと言うのです。だって君はあんな立派な評定をしていたのではないかと糾したところ、あれは昇任前の時期だったから仕方無しでしたと言うのです。がっかりしました。誰でも自分の部下は可愛いし、人より早く少なくとも人並みには進級させてやりたいと思うのは人情でしょうが、それが過ぎるとせっかく

の評定制度が死んでしまいます。文化水準を表すと言われる所以です。

海軍では、学校卒業時の序列にとらわれすぎたといわれます。ある研究では、学校三年間の成績が、その後大佐になるまでの二十何年間の努力に匹敵したとのこと。卒業時の序列が重きを為した原因には、先程述べた考課官の一般的傾向や多くの人の相対的考課を行う機会の少なかったことの外、海軍人事の保守的傾向が挙げられましょう。多くの人の相対的評価を行うことの難しさについては私自身も幾たびか経験し悩みました。在職当時の勤務評定は三段階になっていて、評定官の評価が集められて一つ上の調整官の段階で序列をつけ、さらにもう一つ上の審査官を集めて序列をつけるようになっていました。自分が評定を書く段階では、勿論よく本人を知って書くわけですから、適確かどうかは別として、少なくとも自分なりには何人かの相対評価も出来るわけです。しかしここでも、昇任後の経過年数やその人の特長と短所をどう評価するか、将来性と実績のウエイトをどう考えるか等決して簡単ではありません。それが上の調整官の段階、さらにもう一つ上の審査官の段階になりますと、平素の接触もあまりなく直接知っている人は少ない。多くは間接的で、なかには名前しか知らない人がいる。そういう人たちの相対評価を自信を以て行うのは不可能でした。勿論よく知っている人もいますが、知らない人と比べるのは難しい。それまでにつけられた序列を変えるだけの自信がないというのが本音でした。

海軍人事の保守的傾向の一番よい例は、限定的、保守的に運用された抜擢制度でしょう。この保守性は、長幼の秩序を尚び、年功序列を重んじる日本の社会的風土と海上に於ける経験の重要な海軍の要求に適合し、むしろ居心地の良い環境として迎えられていましたが、その欠陥は大東亜戦争によって如実に暴露されました。実戦に於いて立派な成果を示した指揮官も年次や先後任の関係から抜擢するによしなく、適材適所の配員を不可能ならしめました。米海軍の年次にとらわれない思い切った配員や抜擢と比較するとその差は顕著であります。海上自衛隊では、この反省から大局的視野に基づく抜擢をもう少し積極的に行い、平素から、古参クラス出身者を、新参クラス出身者の部下に配員することも躊躇しないで、その雰囲気の中での統率に馴れさせております。

海軍でもそうでありましたが、海上自衛隊で一層困難なことは、有事に力を発揮する人材を平時から発掘し育成することにあります。米海軍にもピースタイムアドミラルとかウオータイムアドミラルという言葉がありますように、平時は規則や慣例を熟知し、政治的手腕に富み、説得力と調整力に優れ、予算をうまく取る人が、重宝がられる。ところが有事には、戦いに勝つことが至上命令となり、アグレッシブで、イニシヤティブに富む人が不可欠になります。ところが、両方ともに優れた能力を兼ね備える人は少ない。有事向きの人とはかく上司や周囲と衝突を起こして嫌われ易く、平時には活躍できない場合が多いものです。特に50年平和が続く、シビリアンコントロールの徹底した海上自衛隊では、この傾向が大きいように思われることが気になります。

人事については、高級人事、計画配員、信賞必罰、要員養成計画、政策と人事などの問題もありますが、高級人事に内局の意向が働くこと、予備員の確保がほとんどない事などの外は、海軍と海上自衛隊に大きな違いはないと思いますので省略しましょう。

次はシビリアンコントロールの言葉が出たついでに、海軍と政治の関係についてみてみましょう。もともと海軍が対外的意味を持って創られ、海上を舞台とするために、国内政略との結合関係がほとんどなく、国内政治より離隔して政治力が弱く、国民とも疎遠になりがちなことは万国共通の現象でありまして、海軍も海上自衛隊も例外ではありません。満州事変以後陸

軍の政治介入が著しくなり、国内政治さらには対外政策が陸軍の意向によって強く影響されるようになると、これに反対し危機感を持つ人々は、海軍が政治力を発揮して陸軍を抑制し、穏健な政治路線を取らせることを求めました。しかし海軍にはそのような政治力はありませんでした。海軍の出来たことは、陸軍主導の極端な行き過ぎに抵抗し、それを和らげるのが精一杯でありまして、大勢を左右することは勿論、十分な抑制も出来ず。その果たした顕著な役割は、国内の他の諸勢力と協同して、三国同盟の締結を一時的に遅らせ、また、終戦への道を開くことにとどまりました。

海軍当時、政治力発揮の決め手は、統帥権の独立と、海軍大臣の現役武官制にありました。しかし海軍はこの伝家の宝刀を抜いて、意図的に内閣の成立を阻止し、あるいは崩壊させたことは殆どありませんでした。それは、もともと海軍にそのような政治的行為の責めに任じ、その後の政治的收拾を図るような体質も、その用意もなかったことが基本ですが、情勢が緊迫すると、陸軍との正面衝突を避けるという配慮が優先したためでありました。伝家の宝刀を与えられても、それを抜いて成功するためには、それ相応の政治的環境を醸成する政治力がなくてはならず、逆にそのような政治力があれば抜く必要もなかったといえましょう。海軍に三国同盟を阻止できる力があれば、米内内閣が陸軍大臣の辞任によって倒れることもなかったのであります。

統帥権の独立にしても、海軍は帝国憲法の規定に従い統帥権は独立すべきものとしながらも、その運用は政治と密接に関連することを熟知し、「統帥権独立」の名の下に恣に兵を動かしたり、政治に圧力をかける体質はなく、政治優先の思想は、英海軍から学んで以来大きく変わることはありませんでした。昭和八年、平戦両時における軍令部の権限は大幅に拡大され、軍令部の権威は増大しましたが、軍令部が独走することは全くなかったのであります。

本来海軍に要求される政治力とは、海上防衛の重要性とこれを果たすために必要な国家の対外的、対内的努力を、政治によく理解させ、国家全般の政策と調整しつつ、任務達成に必要な政治の支援を得ることであったはずでありまして、このことは、シビリアンコントロールの今日一層重要になったといえましょう。今日の海上自衛隊にそれだけの見識と説得力そして政治力があるか、これが昔と少しも変わらぬ問題であります。政治に興味を持たず、出来れば触れずにすませたいという体質は、あまり昔と変わっていないと思われます。

次は兵術思想について考えてみましょう。海軍と海上自衛隊とで大きく違ったことの一つが、国際環境と政治的制約の違いです。海軍は明治建軍以来清国、ロシア次いでアメリカと、常に国力において我に優る大国を仮想敵国とせざるを得ませんでした。日英同盟は、日露戦争では間接的には大きく貢献しましたが、直接的な戦闘行動には関係しませんでした。第一次大戦ではドイツ東洋艦隊の処理やこれに伴う海上交通の確保さらにはインド洋、地中海方面の海上護衛など英海軍との連合作戦も若干ありましたが、連合作戦を基にして兵力を整備する考え方は全くなく、別の目標で整備した兵力を状況に合わせて活用するのが基本でした。つまり海軍では国力の限界は当然認識しながら、政治的に制約されることはなく、可能な限りオールラウンドで仮想敵国と相似型の海軍を作り、単独で正面から戦うというのが総ての前提であり、兵術思想もそれに基づいていました。

ところが海上自衛隊はその出発から日米安保態勢を前提として、米軍の指導と援助を以て始まりました。防衛力の整備に当たっても、憲法やその解釈の制約もあり、槍の役割は米軍に期待し、自らは盾の機能だけを整備するという方針で一貫せざるを得ませんでした。つまり海軍では、量的には不十分でも質的には海軍としての一応の機能を備え、その機能の充実と発揮に精魂込めて努力したのに対して、海上自衛隊では、海上防衛に必要な一部の機能しか持つこと

が出来ず、いわば片輪の海軍としての宿命を負っているということが基本的な相違です。それだけに、海上防衛の本来あるべき姿を見失い、米海軍の役割についての理解も出来ず、これに対する要求も出ないといった片輪の幹部を生まないよう不断の努力が必要であります。具体的に言えば、対潜戦や対機雷戦あるいは沿岸哨戒能力は相当ある一方、核抑止力は勿論、空母打撃力、原子力潜水観戦、両用作戦能力は全く持たず、洋上防空能力も極めて不十分であります。今後これらの機能をどう整備するかは政治主導の大きな問題ですが、少なくとも洋上防空能力の一層の充実は不可欠であり、頭だけでもあるべき海上作戦全般を理解できる幹部の育成が重要と思います、

海軍の兵術思想についての最大の反省は、戦争全般の研究が行われず従って戦争様相に対する洞察もなく、国家戦略に対する着眼も海軍の果たすべき役割に対する理解も不十分であったことであります。軍事についても広い視野に立つ戦略的思考を疎かにし、万事戦術面か術科レベル以下に集中した結果、漸減邀撃、艦隊決戦に凝り固まり、これが血肉となって、現に戦争様相の変化が眼前に示されても、なかなか脱却できなかつたことでもあります。この反省から戦後は、柔軟性が強調されてきましたが、長く兵術原則に反する「専守防衛」という政治スローガンのもとに置かれてきた自衛隊が、実際に事が起こったとき何処まで柔軟性を発揮できるか、今後の課題でしょう。国家戦略の必要性と重要性に対する理解は昔の比ではないと思いますが、国家目標も国家戦略も果たして分かっているのか、考えたことがあるのか、疑問を感じる為政者や政治家の多い現代日本では、軍事面から必要な意見を具申し、決まった国家戦略に基づきこれと整合された軍事戦略を検討するという、本来あるべき運びには、なっていないのではないのでしょうか。

創設以来一貫して、如何にして寡を以て衆に勝つかを追求した海軍では、「先制」と「奇襲」を以て勝つという用兵上の思想が確固不動のものとして、根深く底流していました。また攻撃は最良の防御との思想も、海軍の隅々まで浸透していました。アウトレンジとともに決戦に備え兵力を温存するという考えも、国力の乏しいことから生まれて指揮官の頭を支配しました。これらはいずれも適切に応用される限りでは、貧乏国日本に適したものでしたが、とかく行き過ぎるのが人間の常、実際には多くの反省の種になりました。例えば、先制と奇襲のモデルとも言うべき開戦当初のハワイ攻撃は、戦術的には大成功でしたが、現地大使館の考えられない失態もあって、ルーズベルトに政治的に活用され、米国民を団結させ立ち上がらせる契機となりました。またスローガンはあっても、これを裏付けるために必要な情報努力は少なく、偵察兵力も僅かでした。攻撃重視が防御軽視につながったため、レーダーの開発は遅れ、中攻も零戦も燃えやすく、ダメージコントロールは米海軍に大きく後れをとりました。アウトレンジは実戦では遠戦に終始して近迫猛撃の気迫を欠くことになり、兵力温存の考えと相まって、幾たびか敵撃滅の機会を失いました。およそ人間社会にこれさえあれば良いというものではなく、状況に応じ使い分けることが必要です。此の点海軍というよりは日本人の通弊と思われませんが、余りにも割りきったように思います。この反省から海上自衛隊では何事にも柔軟性を強調してきましたが、今度はそれが行き過ぎて強固な意志を失うことのないよう注意が必要でしょう。

以上極めて簡単ながら、海軍の伝統と海上自衛隊の現状について申しあげました。私が生徒のとき、ある教官が、伝統とは良いことを言うので、悪いことは陋習というのだと教えられましたが、一般に海軍の伝統と言うとき両方をひっくるめて言うことが多いようです。ものには必ず両面があるので、私どもが反省はあるものの、とても良かったと思っている海軍の伝統にも、批判者から見ればいろいろ問題があるようです。木山元会長も「水交」に水交会の寄付行

為改正に際し「よき伝統的精神」と「よき」が追加された経緯を書いております。最初に言った一致団結旧套墨守もその一つですが、陸軍からの見方も大いに参考になると思いますので、紹介しましょう。かつて内田さんが「大本営海軍部大東亜戦争開戦経緯」を執筆されてその原稿が完成したとき、慣例に従って戦史部内の部内審議にかけられました。その審議に、「大本営陸軍部大東亜戦争開戦経緯」を執筆された原四郎という方が、招かれて出席されました。この原さんは、今も健在で活躍されている瀬島龍三さんと同期の並び称せられた俊秀で、昭和15年12月から2年間参謀本部の戦争指導班に勤務して開戦に直接関与し、20年3月からは参謀本部の作戦課に勤務して本土決戦準備に当たった人です。審議は「海軍の体質の形成」から始まりましたが、原さんは私の見た海軍の体質は次の通りであるとして、1. 陸軍とのパリティ、悪便乗。2. 意志と態度が曖昧。3. 国民（世論）に迎合。4. 決意なき前進。5. 決心堅確ならず、常に変更、を挙げられました。これが洩る海軍を引きずって開戦にこぎつけた陸軍当事者の、偽らざる感想でありましょう。参謀本部戦争指導班作成の「大本営機密日誌」には、「海軍は最初より対米一戦を主張す、対米一戦の真の腹あつての主張ならば可なるも海軍軍備拡張のための対米一戦ならば、国家の賊ならずや」（16. 2. 17）「海軍側既に情勢の変化を理由とし、武力行使の腹無し、――慨嘆に耐えず、海軍は女の如し、節操も情誼も無し」（16. 2. 22）「海軍次長、次官は腰抜けか、悪辣か、いずれかなるべし」（16. 3. 15）といった激しい不信感が示されています。この不信感がまた原さんのみだ体質に繋がるわけです。この中には陸海軍の違いによる大きな誤解もありますが、陸軍の立場から見ればそう取られても仕方がないと思われるものもありません。

一番誤解のもとになったのは、陸軍の動員と海軍の出師準備の相違であります。海軍では出師準備や作戦準備が所要に応じ何時でも中止復旧し、あるいは変更できる融通性を持っていましたが、陸軍では実行の決意のないまま動員の発動は困難でありました。この相互の特長について説明や理解が不十分であったように思われます。海軍は、昭和15年11月15日出師準備第一着作業を発動しました。これは完成まで6ヶ月ないし1年を必要とする実状に加え、平時は訓練中心の編成とし、出師準備により、一斉に戦時編制に移行する計画が、欧州戦局の急変に伴う国際情勢の緊迫に適合しなくなったので、情勢の変化に即応できる態勢を整えるため、戦争決意とは別問題として、閣議の承認のもと天皇の名において発令されたものでありまして、責任当局としては、当然の処置でありました。このとき及川海軍大臣は、天皇の御下問に答え、状況緩和すれば後日復旧する旨奉答しています。なお出師準備第二着作業は16年11月5日の御前会議の後6日発動され、進攻作戦に直接関連する特別陸戦隊、設営隊、特設燃料廠等が初めて編成可能になったわけでした。それまでは総て緊急事態に応じ得るための態勢強化に過ぎなかったのであります。

一方陸軍の作戦準備の主なものは、船舶の大量徴用、大規模動員、戦闘序列の下令、軍隊軍需品の予想戦場方面に対する集中、兵站基地の設定等でありまして、これらは国内態勢を平時状態から戦時状態に大きく転換させるだけでなく、いちど予想戦場方面に集中展開した大軍の撤収には大きな抵抗があるので、国家の戦争決意の確立を待って行うべきものであるというのが、陸軍特に参謀本部の持論でありました。このような両者の考え方、性格の相違が、不信感のもとになったと思われ、

また元来海軍では、機動的後方支援が発達し決心変更が容易に行われましたが、陸軍は後方が重いことから一度決心したことは変更しないと言う習性がありました。陸軍はこの海軍の決心変更に度々苦汁を飲まされたと感じていたようであります。

対陸パリティ、悪便乗についても一寸コメントしておきましょう。確かに陸軍と同等の発言

権を求めるのは明治建軍以来の海軍の悲願であったといえましょう。山本権兵衛さんの大変な努力でやっと陸海軍同等になったのは日露戦争の直前でした。それ以来陸軍では、海軍が抵抗勢力になるのを嫌う考えが潜在しており、いわゆる一軍思想も海軍の抵抗を除くためと海軍では考えたのであります。陸軍から見れば、海軍は世論におもねりよい子になっておきながら、陸軍がやっと獲得した成果だけはちやっかり自分も頂くという風に見えたこともあるかもしれません。私が一つ思い当たるのは、海軍は満州事変には反対であり協力しなかったのに、論功行賞では荒木陸軍大臣と同じく大角海軍大臣が男爵を頂いています。これは上海事変も入ったことでは、全く悪便乗といわれても仕方がないと思います。

以上陸軍から見た批判に触れましたが、私の言いたいことはこのような誤解を生じないようにお互いの特質について相互理解を深めることともに、伝統であるからといってこれに安住せず、常に謙虚に反省し、より良いものにしていく努力が必要であるということでもあります。この反省と改善の努力あって初めて伝統を継承する意味があることを強調して私の話を終わりたいと思います。